

図書館はどうみられてきたか

日本のミステリと図書館員——東野圭吾・法月綸太郎のケースについて

佐藤毅彦

1. はじめに

ひとつひとつの図書館の実態が同じではないように、図書館という言葉からイメージされるものについても、それを受けとめるがわの個人、ひとりひとりによって異なっている。今日、図書館には、資料の利用者、資料の生産者である小説家・研究者などの著作者、図書館職員（正規）はもちろん、非正規職員（嘱託、パートタイム勤務者など）、出版・流通関係者、図書館学教育・研究者、ボランティア、などさまざまな立場からかわりをもつ人たちが存在している。そうした多くの人たちが図書館について考えているイメージは、決して一様なものではない。たとえば図書館での資料の選択ひとつとっても、あまり一般には売れなさそうな本でも、全国の図書館が一冊ずつでも購入してくれることによって、出版不況の克服、さらには出版業という文化事業自体の衰退を防止することになるのではないかとの思い込みがあるようだ¹⁾。こうした図書館資料の選択の問題だけでなく、現在図書館界で話題になっている、電子図書館構想、専門職制度、ボランティアなどをめぐる論議も、「自身の考えている図書館のイメージこそ、図書館関係者の大多数に共通するものである。」という思い込みを背景にしてなされている感がある。まず、議論の前提として、図書館のイメージやそこに期待される機能が多様なものであることを、認めることが必要なのではないか。

図書館のイメージを形成する要素としては、実際の利用体験や職業を通じての関わり以外に、メディアに登場した図書館がどのように描かれていたか

によって、個人の感覚が影響を受けていることが考えられる。とくに図書館をあまり利用していない人たちや、過去に利用経験はあるものの最近ではめったに図書館へ行かなくなってしまった人たちにとって、メディアのもつ意味は大きい。この場合メディアといっても多岐にわたるが、新聞・テレビなどの報道、小説・映画・テレビドラマなどのフィクションの作品、新聞雑誌の広告・テレビCM、などがその主なものであると考えられる。

これらのうち、映画に登場する図書館については、最近刊行された飯島朋子の『映画の中の図書館』に図書館や図書館員の関係する映画のリストと内容の分析が掲載されている²⁾。また、こうしたテーマに継続的に取り組んでいる市村省二の見解が、インタビューに答える形で『TRC ほんわかだより』に発表されている³⁾。さらに、近年の『図書館雑誌』には東史「映画の図書館・図書館の映画」が、不定期に連載されている⁴⁾。

筆者は、いくつかの領域からこうしたテーマへのアプローチを試みてきたが⁵⁾、今回は日本のミステリと図書館との関係について、作品の中で図書館や図書館員を登場させていることが比較的多い、東野圭吾と法月綸太郎をとりあげ、その作品と図書館の関係について、図書館員の描かれかたを中心に論じる。

2. 日本のミステリ作家と図書館

日本と比較して、「英米の推理小説を読んでいると、登場人物がごく自然に公共図書館を利用する場面が多い。」ことを長谷部史親は『推理小説に見る古書趣味』において指摘している。たとえば、レイモンド・チャンドラーの『大いなる眠り』には、ロサンジェルス私立探偵フィリップ・マーロウが古書業者を訪ねる前に「ハリウッドの公共図書館に立ち寄って、初版本に関する細かい知識をいくつか仕入れる。」シーンがあることが例としてあげられている。英米では、司書の助力で求める情報を入手しているのに対して、日本の推理小説で図書館を利用する例が少ない原因として「日本の図書館は、

ややもすれば学術的な調査研究機関としての機能と、読物から漫画、ビデオ、CDなどを貸し出す機能の二極に分化している傾向があり、それ以外のたとえば社会生活全般に関する情報提供機関としての機能があまり期待されていない。」ことをあげている。したがって「かりに図書館へ行っても、求める情報が得られないという意識が定着しているために、はじめから一般人の眼中にないのである。小説は社会を映す鏡であり、もしも作中の人物がたまたま近所の図書館を訪ねて、容易に情報にアクセスする場面を描いたりすると、現実味が薄いなどと酷評されかねない。」と述べている¹⁾。さらに、英米では情報の公開が進んでいることや、図書館の整備状況・予算規模・専門職員の配置、などの点における違いを指摘している²⁾。

こうした点について、実際に日本の場合、ミステリの書き手の側はどのような感覚をもっているのか。ひとつの参考として、彼らが、どのくらい図書館を利用した体験をもっているのか、何人かの体験がインタビューを通して語られている。

『ミステリを書く!』には「現代を代表する11人の作家」に対するインタビューが収録されている³⁾。子供の時代からの読書体験や作家になるまでの経緯などについてふれている中で、とくに図書館について言及している部分は次のようなものである。

・馳周星（1965年、北海道生まれ）

「ミステリに初めて触れたのは、小学校のとき、図書室にあった江戸川乱歩の『少年探偵団』シリーズとか、(略)学校の図書室にある読みたいものはだいたい読み倒して。(略)それで、町の図書館へ行くようになると、ポプラ社の『世界SF全集』とか(以下略)」

・京極夏彦（1963年、北海道生まれ）

「ミステリ以外は普通の児童文学——要するに小学校の図書室においてあるようなものですね。それはだいたい読みました。ただ、よく考えてみると『赤い幼虫』（乱歩『幼虫』のポプラ社版のタイトル）が図書室に置

いてあるのは、おかしいよね。」

- 法月綸太郎（1964年，島根県生まれ）

「一番覚えているのは、中島河太郎さんの『推理小説の読み方』という本が中学校の図書室にあって、それを何回も借りて読んでいた。（略）中学以降にクイーンおたくになったんですが、（略）ただ、地元の図書館で八割方借りて読んでたもんで、翻訳ミステリというのは新刊のハードカバーのほかは創元の文庫しかなかったんです。」

- 山口雅也（1954年，神奈川県生まれ）

「小学校5年の頃だったと思いますが、例によってポプラ社の江戸川乱歩の全集が学校の図書館にあって——正確なネーミングは『明智小五郎全集』だったかな、——それが最初のミステリとの出会いです。（略）子供向けのルパンやホームズを読んで、それからあかね書房版の推理小説全集が、小学校ではなく市立の児童図書館にあったのを見つけて、これはジュヴナイルなんだけど、その手の全集としては、非常に優れたものだったんです。」

- 綾辻行人（1960年，京都府生まれ）

「小学校四年生の終わり頃、ポプラ社から出ていた怪盗ルパンシリーズの『奇巖城』と少年探偵団シリーズの『妖怪博士』、この二冊をほぼ同時に読んだんです。買って読んだわけでも図書館で借りて読んだわけでもなく、（略）それまでは、マンガ以外の本を読むといえばSFでした。学校の図書室に子供向けのSFシリーズがあって、それで『宇宙戦争』とか『地球最後の日』とかいった作品を読んでいた記憶があります。」

- 井上夢人（1950年，福岡県生まれ）

「僕は、小学校の頃が一番本を読んだんじゃないかと思うんです。児童図書館の棚はほとんど全部読んだという記憶があって（以下略）」

また『ニューウェイヴ・ミステリ読本』では、18人の作家にインタビューしているが、そのうちの4人の作家が図書館利用についてふれてい

る⁴⁾。

このような発言に現れているように、学校の図書館・図書室や公立の図書館などの利用体験を語っている作家がある程度存在している。インタビューの対象になっているのが、現在活躍している作家ということで30～40代が多く、その年齢層が少年であった時期（1960から70年代）は、日本の図書館状況が整備されていった時代でもあった⁵⁾。現在のように、多くの自治体で図書館がつくられ、利用者の要求に対応したサービスを展開していたわけではないが、公共図書館をはじめとする図書館サービスの改善が、東京を中心とする都市部から周辺へ波及していったのがこのころである。

これまで、フィクションの中での図書館の描写が話題になったケースには、図書館における個人のプライバシーの扱いに関係したものが多い。登場人物が、図書館で何を利用していた（している）か、を調べることがストーリーの展開に関与しており、その場合貸出方式がそうしたことを可能にするものであることを前提に話が進められていた。1960年代後半から70年代にかけて、とくに市町村立図書館では、個人貸出冊数が増大していくとともに、貸出方式も変化しており、作者自身の図書館利用体験を参考にしたものには、現実の状況と異なる部分が生じていた⁶⁾。さらに図書館界では、1979年の「図書館の自由に関する宣言」改訂で、利用者のプライバシーに関する条項が主文のひとつに加えられたように、プライバシーについて一定の配慮を必要とすることが、共通認識として広まりつつあった。先にあげたケースは、利用体験から受ける図書館のイメージと、図書館の実態との間にギャップが存在していたことを示す事例であるといえよう。

3. 東野圭吾と図書館

東野圭吾は、1958年、大阪府生まれ。『放課後』で1985年、第31回江戸川乱歩賞を受賞して以来、長編・連作短編・短編集・エッセイ集など、あわせて、40点あまりの単行書を刊行してきている。1998年に刊行された『秘

密』は第52回日本推理作家協会賞を受賞し、広末涼子主演で映画化された。また、1999年に刊行された『白夜行』は各書評で絶賛されている¹⁾。作風がヴァラエティに富むことでも知られ、多様な傾向の作品を発表しているが、デビュー以来いくつかの作品において、図書館や図書館を利用する人物を登場させている。彼の作風同様、その作品の中に登場する図書館もヴァラエティに富んだものになっている。

東野圭吾の作品に登場する図書館と図書館を利用する人物、利用目的について簡単にまとめると次のようになる。

(長編)

- ・『学生街の殺人』女子大生が、昔の新聞を見るために利用する。図書館員との対話あり²⁾。(後述)
- ・『魔球』野球部員の高校生が、学校図書館に受験参考書を返却に行く。時代は、1964年。図書館員との対話あり³⁾。(後述)
- ・『香子の夢』24歳のパーティー・コンパニオンが、美容院にいくついでに中野図書館を利用、三年前の事件について縮刷版で調べる⁴⁾。
- ・『十字屋敷のピエロ』化学専攻の大学院生が、大学の図書館に電話して、鑑識の本はあるか、それに指紋の取り方は載っているか、聞く⁵⁾。
- ・『変身』産業機械メーカーの工場に勤め、系列の専門学校に通っていた人物が、事故により脳の手術を受ける。その人物が、図書館に行って、脳や精神に関する本を借りる⁶⁾。
- ・『同級生』野球部マネージャーの女子高校生が、春休み中、学校の図書室を利用する⁷⁾。
- ・『分身』女子大生が、自分の出生の事情について調べるため、父の出身大学で卒業生の名簿を調べる。図書館員との対話あり⁸⁾。(後述)
- ・『むかし僕が死んだ家』文学部卒の女性で、現在は専業主婦の人物が、昔の恋人が書いた文章の載った雑誌を図書館で読む⁹⁾。
- ・『虹を操る少年』天才的な人物が、中学生時代に一日一冊のペースで本を読破する。父親の書棚のものを読み尽くし、図書館へ行って借りてくるよ

うになる¹⁰⁾。

- ・『悪意』本なんか全く読まない人物が、自分の同級生が関係した事件について調べるために図書館を利用する。図書館に行ったのは初めてで、緊張する¹¹⁾。
- ・『名探偵の呪縛』作家が、訪れた図書館で別世界に迷い込み事件に巻き込まれる¹²⁾。(後述)
- ・『秘密』自動車部品メーカー生産工場の班長が、交通事故に遭遇した妻が脳に変調をきたした原因を探るため、図書館を訪問する。娘の担任教師と出会う。図書館員との対話あり¹³⁾。(後述)
- ・『私が彼を殺した』タクシーの運転手が、目的の場所が図書館の近くであると発言する¹⁴⁾。
- ・『白夜行』①西長堀の(大阪市立)中央図書館。高校生の登場人物が、何度か利用経験がある。夏などは、自習室を使おうとする受験生で、入り口に列ができることもある。時代は、1979年ごろ。②中之島にある(大阪)府立図書館。大学生の登場人物が、新聞の縮刷版を調べる。時代は、1980年ごろ。③近鉄布施駅の北側にある図書館。小学生時代の主要な登場人物たちふたりがいっしょに利用、本を借りることもあった。時代は、1973年ごろ。警察が捜査に訪れ図書館員と対話する¹⁵⁾。(③は後述)

(連作短編)

- ・『浪花少年探偵団2』ヒロインの小学校教師が、図書の時間で、学校図書館を利用している。学校図書館は児童書については充実しており、新聞の縮刷版も所蔵している¹⁶⁾。
- ・『探偵ガリレオ』登場人物がのひとりが声のボランティア活動をしている。目の不自由な人のために図書館で貸し出す、本の朗読テープを吹き込む仕事。専門のトレーニングを受けなければならない¹⁷⁾。

これらの作品の中で描かれている図書館は、学校図書館(『魔球』『同級生』『浪花少年探偵団2』)、大学図書館(『十字屋敷のピエロ』『分身』)であることがはっきりと示されているもの以外は、公共図書館であると思われる。

利用しているのは、学生や知的職業についている人物が多いが、パーティー・コンパニオン（『香子の夢』）、利用経験が全くない人物（『悪意』）、工場労働者（『変身』『秘密』）などが利用している例もある。ただ最後のケースでは、系列の専門学校に通う（『変身』）、生産工場の班長で、高校時代に自習室で受験勉強したことがある（『秘密』）など、単なるブルーカラー労働者とは言い切れない設定になっている。

図書館を利用するのは、何か目的のものや資料があり、図書館で調べることによって課題解決のための資料・情報を入手しようとして、であるケースが多い。現在の公共図書館を利用している人たちの主な目的のひとつである、娯楽のための読物や新聞・雑誌を利用するケースは、主要な登場人物の利用形態としてはでていない。『むかし僕が死んだ家』では、主婦が雑誌を利用しているが、この場合もはじめから目的のものがはっきり決まっている。

そうした中で図書館員が登場し、主要な登場人物と会話を交わしたり、ストーリー展開上、一定の役割を果たしているのは次の作品である。

・『学生街の殺人』¹⁸⁾

図書館を利用した女子大生が、翌日ふたたび図書館を訪れると、前日彼女が調べた内容について、警察が捜査に来たことを知らされる。「リファレンスの女の人が教えてくれたのよ。あたしがコピーしたページを、そっくりそのままコピーしてくれっていわれたって。」

図書館員が警察の要請にどう対応したかは、明示されていないが、はっきり断ったとは書かれていないので、コピーに応じたのではないと思われる。なお、前後の文章から、この利用が大晦日の直前（12月29日と30日）になされたことがわかるが、年末年始（12月28ないし29日から1月3ないし4日まで）は、ほとんどすべての図書館は完全に休館しており、実際には起こりにくい状況であるといえる。

・『魔球』¹⁹⁾

1964年当時、高校生の野球部員が、貸出期限を過ぎた受験用の参考書を図書館に返却に行く。「図書館の事務員は、三角形の眼鏡をかけた『ヒス』

という渾名の女性」である。期限に遅れていることを知ると「例によって尻をつりあげた」が、同じ野球部員だった人物の借りたままになっている図書館の本2冊を、家まで取りに行ってくれるよう依頼する。「黄色いカードを二枚」使用しており、「貸出者の氏名が書いてある」とあることから、一部の学校図書館に現在でも残っている、ブックカード式の貸出方式であろうと思われる。こうした対応は異例のことだし、本来は図書館員が直接問い合せすべきことである。しかし、時代的には1960年代半ばに設定されており、学校図書館での利用者のプライバシーの扱いについては、現在でも重視されているとは言いがたいので、いちがいにリアリティに欠ける描写とは言えない。

・『分身』²⁰⁾

女子大生が、出生の秘密を知るため、父親の出身大学へ行く。「図書館は、私の通う大学なら大講堂に見えるのではないかと思えるほど、立派で荘厳な雰囲気を用意していた。中は博物館のようにひっそりとしている。」二階の特別閲覧室には本は一冊もなく、机と椅子だけが並んでいた。「部屋の隅に、係員らしき若い男性が一人いるだけで、閲覧者は他にはいない。」その男性の図書館員は、主人公の女性が、アマチュアバンドのどでいるテレビ番組の出演者にそっくりだと発言する。彼は、求められた資料である「分厚いファイル」を提供した後、「それにしても似てる。僕は気に入った女性の顔は、一度見たら絶対に忘れないんだけどな。」と呟いた。

「若い男性の図書館員」というのもめずらしいが、かなりナンパな発言をしているという点でも、東野圭吾の作品の中で、例外的な存在である。

・『名探偵の呪縛』

主人公は、小説家で、現在取り組んでいるのは、核ジャックに関する小説である（東野圭吾に『天空の蜂』という、これに近いテーマを扱った作品がある）。

図書館の施設・設備は「白い鉄筋コンクリート製の、素気ない建物である。中央図書館、という名前がついているだけあって、中はやたらと広い。ただ

し蔵書数は大したことがない。それでもちょっとした調べ物をするには重宝している。」と紹介され、館内は、「玄関に入ってすぐのところに貸し出しカウンターがあって、その横に、『今月の人気書籍』と書いたパネルが立てられていた。貸し出しランキングというわけだ。フィクションでは相変わらずミステリが多い。一応ミステリ作家の看板を上げている身としては心強いことではある。」と描写されている。文芸書のフロアには、本人のほかに全く人がいない。そうした館内の状況について「今更ながら、本離れを痛感せざるをえない。夏の真っ盛りになれば、冷房目当てに図書館を訪れる者も増えるだろうが、それでも彼等は雑誌コーナーに居座ったままに違いない。」「これほど多くの本が出版されるのも、一冊一冊の本が売れないからにはほかならない。出版社は全体の売り上げを保つために、多種少量生産の方針を固めているのだ。作家がどんなに心血を注いだ作品であっても、出版社としてはワンオブゼムに過ぎない。どんなに優れた作品であっても、評論家が特に取り上げでもしてくれないかぎり、瞬く間に大量消費の波に飲み込まれてしまう。私は書棚の間をさまよいながら、墓場を歩いているような気にさえなった。そうだ、ここは本の墓場なのだ。」と述べられている²¹⁾。

その図書館の「カウンターには紺色のカーディガンを着た、四十歳ぐらいの女性が一人いるだけだった。やたら粉っぽい化粧をしており、口紅の赤色が浮いていた。」そして、本格推理小説について尋ねると、「係の女性は明らかに描いたものと思われる眉をひそめ」少し考えてからカウンターを出て『文学』コーナーの中の、『娯楽』の棚に案内する²²⁾。

「本の墓場」という表現にいたる前の数行には、東野圭吾自身の図書館に対する複雑な感覚が凝縮されているとも考えられる。また、「素気ない建物」「中はやたらと広い」「蔵書数は大したことがない」「ちょっとした調べ物をするのには重宝」といった箇所は、最近の公共図書館の特徴が、部分的にはかなり正確にあらわされている。

・『秘密』²³⁾

時代設定は、1985年。主要な登場人物のひとりである平介は、ある自動

車部品メーカーの生産工場に勤めており、一昨年から班長を任されている。彼は、交通事故に遭遇した妻の事故後の状況について調べるために、図書館を訪れる。

図書館の「建物は想像していた以上に立派だった。しかも新しい。なるほど自分たちが納めている税金は、こういうところに使われていたのかと、平介は改めて認識した。だがこれほどしゃれた建物にする必要はないんじゃないか、とも思った。少なくとも、誰も見向きもしない中庭や、価値があるかどうかともよくわからないオブジェもどきの置物は不要だろうと感じた。」と描写されている。

館内の状況については、「図書館に入るのは、高校生のとき以来だった。しかもあの時でさえ、目当ての本を探しに来たのではなくエアコンのきいた自習室で友人と受験勉強をするのが目的だった。つまり平介としては、本来の目的のために図書館を訪れたのは初めてということになる。中に入ると、彼は真っ直ぐにカウンターのところへ行った。カウンターには二人の係員がいた。一人は中年の男性で、もう一人は若い女性だった。」とある。彼が、脳に関する本について尋ねると、女性図書館員が書架まで案内してくれる。「フロアは広く、本棚がいくつも並んでいた。どの棚にも、分厚い書物がびっしりと並んでいる。しかしその棚の前に立っている人間の数は、驚くほど少なかった。これが本離れということなのだなあと平介は思った。」もっとも、医学書のコーナーは、「ほかのコーナーには人が少なかったが、ここだけは妙に本を探している人がたくさんいた。全員が男性であり、風貌は違えども、皆恐ろしく頭がよさそうな顔つきをしている。」とされている。

結局「脳医学」関係の資料を調べても、必要な情報が得られそうになかった。アプローチの視点を変えて、「世にも不思議な話」の本について尋ねると、「係の女性は胡散臭そうな目で彼を見た。」そして、娯楽本のコーナーの奥にあると紹介し、「係の女性は遠くを指差した。『あの奥に、超常現象というコーナーがあって、UFO だとかの本も置いてあるはずですよ』 どうやら今度は案内してくれる気はないようだった。」という対応をしている。この

コーナーで「憑依」「多重人格」について書かれた資料を平介は読んでいる。

その書架の前で、娘の担任教師と出会い、「こういうところに来ると、なんかこう妙に緊張しちゃうんですね。肩が凝っちゃったなあ。」と言う。さらに館内での他の利用者について「でも、結構居眠りしてる人がいましたね。」「平日の昼間だと、よくサラリーマンらしき人が昼寝をしておられますよ。」というやりとりがある。

図書館に「自分たちが納めている税金」が使われていること、「中庭」や「オブジェもどきの置き物」は不要であろうこと、など納税者としての公共施設に関する率直な感覚を表明した発言がある。また、高校生の時は、エアコンのきいた自習室で友人と受験勉強したこと、この種の場所に来ると「妙に緊張」し「肩が凝っちゃう」ことなど、現代の成人利用者が共感を示すと思われるような発言もある。さらに、医学書のコーナー以外は人が少ない、平日の昼間にはサラリーマンが昼寝をしている、など利用状況に関する描写もなされている。図書館員はカウンターに二人、男性は電話中で、女性の図書館員が登場人物の質問に対応しているが、書架に案内するのみで、質問内容について具体的にアドバイスすることはない。

・『白夜行』²⁴⁾

時代は、1973年ごろ。近鉄布施駅近くの、小さな灰色の建物が図書館だった、とある。そこにいる職員は「かつては文学少女だったろうと思わせる眼鏡をかけた図書館員」で、「笹垣（筆者注・警察関係者）は西本雪穂の写真を見せた。彼女は写真を見るなり、大きく頷いた。」図書館員は、写真の女の子が図書館をよく利用していて、たくさん本を借りていたことや、時々男の子と一緒にあったことを話している。さらに男の子の写真の見せられ、「こういう感じの子でした。はっきりとは断言できませんけど。」と言っている。それは「自分の意見が何かの決定力を持つことを恐れたのか、図書館員の口調は慎重だった。」ということだが。

最近の図書館事情を反映したものとして、たとえば『探偵ガリレオ』で障

害者サービスのための朗読ボランティアがとりあげられていたが、『名探偵の呪縛』『秘密』では、施設・設備の特徴や館内の状況が紹介されている。『名探偵の呪縛』では「今月の人気書籍」といった貸出ランキングに相当するものが館内に掲示されていること、『秘密』では平日の昼間にはサラリーマンらしき人が昼寝をしていること、などが描かれている。館内は、「文芸書のフロアには全く人がいない」（『名探偵の呪縛』）、「棚の前に立っている人間の数は、驚くほど少なかった」（『秘密』）など利用者が少ないことも述べられている（もっとも脳医学関係のコーナーは「ここだけは妙に本を探している人がたくさんいた。」とされている）。利用経験の少ない人物の意識としては、「なんだか緊張しちまってね」（『悪意』）に加えて、「妙に緊張しちゃうんですよ。肩が凝っちゃったなあ。」（『秘密』）といったコメントが紹介されている。

図書館員が登場しているもののうち6編中5編は女性である。これらの人物の外見については、「三角形の眼鏡をかけた『ヒス』という渾名の女性」（『魔球』）、「紺色のカーディガンを着た四十歳ぐらいの女性（中略）やたら粉っぽい化粧をしており、口紅の赤色が浮いていた。」（『名探偵の呪縛』）、「かつては文学少女だったろうと思わせる眼鏡をかけた図書館員」（『白夜行』））というように描写されており、ステレオタイプの古い図書館員をイメージさせるものである²⁵⁾。

利用者のプライバシーの問題に関する図書館員の対応については、警察の捜査に協力し、それを利用者にも告知する（『学生街の殺人』）、利用していたかどうかの警察の捜査に回答する（『白夜行』）、他人の貸出状況について他の生徒に教える（『魔球』）などは、現代の視点からみると配慮に欠ける対応であると考えられる。ただ、『白夜行』では、単行本の後半に出てくる場面ではあるが、時代設定は1973年ごろであり、『魔球』も1964年当時が舞台で、しかも現在でも十分な職員体制がとられているとはいえない、学校図書館での話である。

利用者の問いかけに対して、図書館員がどのように応じているかについて

は、目的の資料を提示する（『分身』）、資料のある書架に案内する（『名探偵の呪縛』『秘密』）、などの対応をしているが、これらはとくに図書館員に専門的な知識・経験が必要であることを、明確に印象付けるものとは言えない。『秘密』では、脳医学について尋ねた際は書架まで案内してくれたのに、そうしたアプローチでは必要な資料が見つからないので、世にも不思議な話の本について尋ねると、胡散臭そうな目で彼を見、娯楽本のコーナーの奥を指差すのみで、案内はしてくれない、というように、尋ねる分野によって対応に差のあることが描写されている。なお、広末涼子主演の映画『秘密』では、平介が図書館を利用するシーンはあるが、図書館員に相談することなく、ひとり図書館内のデスクで、「憑依現象」について書かれている資料を読みこむ描写になっている。

こうした作品全体を通して感じられるのは、図書館員について、冷淡な見方をしているといってもいいくらいの描写になっているということである。利用者の質問に対しても、せいぜい目的の資料のある書架に案内する程度で、専門的な知識が発揮されている対応をしているとは言いがたい。しかし、いちがいにリアリティに欠けているかといえば、必ずしもそうではない。会社員の図書館利用が、最近増えていることは事実であるとしても、実際に利用が少ない図書館も、曜日や時間帯によっては、ありえない話ではない²⁶⁾。プライバシーの扱いについても、少なくともここにあげられているような対応は、現実ばなれしているとは言いきれないし、物語の舞台となっている時代を考えれば、なおさらそうである。作品全体を見れば、かなりの程度図書館の実態を理解しており、むしろこれだけの作品に図書館を登場させていること自体が、日本のミステリの状況から見て異例なことと言えよう。

4. 法月綸太郎と図書館

法月綸太郎は、1964年、島根県生まれ。京都大学在学中に推理小説研究会に所属し、1988年『密閉教室』でデビュー。長編・短編集・ミステリ評

論など10点あまりを刊行してきている。このうち、作者と同名の探偵・法月綸太郎は、長編に登場するとともに、連作短編集『法月綸太郎の冒険』『法月綸太郎の新冒険』でも探偵役をしている。その中に、綸太郎の友人で、区立図書館司書の「沢田穂波」が登場する作品がいくつかある。彼女は、「綸太郎が従来から図書館司書という存在に対して漠然と抱いていた偏見を、いっぺんに打ち破ってしまうような女性だった（それがどんな偏見であるか、ここでは言わない方がいいとしても）。」と描写されている¹⁾。

この「図書館シリーズ」といえる一連の作品について、法月綸太郎はインタビューに答える形で「貸し出し記録から性格を割り出すというアイデアが最初にあったんです。あるいは、本を通じた見えないネットワークを探るとか。確かにプライバシーの問題もあるんだけど、そうじゃない面には未練がありますね。」と述べている。(なお、このインタビューは1996年12月に行われたものであることが記載されている。)²⁾ こうした発言の背景にあった事情について、1995年11月に刊行された文庫版の『法月綸太郎の冒険』に、「文庫版追記『図書館の自由』をめぐって」が掲載されている³⁾。この文章の前半には、「『小説CLUB』(桃園書房)の1993年3月号」に書いたエッセイがそのまま転載され、『法月綸太郎の冒険』に収録した「切り裂き魔」のストーリーに関して、大学で司書課程をとっているの女性の読者から手紙がよせられたことが紹介されている。そして、その手紙では、図書館はプライバシーの保護に万全の注意を払っていった、本が返却された時点で記録は速やかに抹消されること、部外者に安易に利用記録を見せる事実はありえないこと、図書館におけるプライバシーの扱いは、司書職のプライドに関わる問題であること、などが書かれていたと述べられている。

法月綸太郎は、これに答える形で、「フィクションとリアリティの問題にからめて言えば、この部分は物語の設定の一部であって、それ抜きではフィクションが成り立たない。私は小説とはもっと融通が利くものだと考えている。したがって、できあがった作品をどうしようという気はないのだが、それと作品の外で誤りを認めるのは、まったく別のことである。」と主張し

ている。プライバシーの問題についても考慮はしたが、館長の許可・立会を条件にし、また、司書の資格を持っていて、高校の図書館に勤務したことのある母親も、この件に関して何も発言しなかったので、問題はないのだと思っていた、と述べている。

後半部は、文庫版のあとがきとして、新たに書かれた部分で、文庫にする際に当該箇所をどうするか検討はしたが、結局、元の記述を残すことにしたことを、まず書いている。しかし、「このエッセイ（筆者注・先の前半部にあたる）を書いた時点で私はまったく理解していなかったことになるが、これはいわゆるリアリティ云々の問題ではない。『図書館の自由』という理念をめぐる問題なのである。そして実情にそぐわない記述を残したのは、この問題に関して、ほっかむりをしないためだというように理解していただきたい。」と記述している。

探偵・法月綸太郎の登場する連作は、その後も発表されつづけており、その中には「図書館シリーズ」もある。こうした法月綸太郎の作品の中で、「図書館の自由」の問題に関連して、図書館員がどのように描かれているかを、発表年代順に検討する。

・「切り裂き魔」⁴⁾（初出：『コットン』1990. 4）

図書館の蔵書の扉ページが切り取られている事件が発生し、綸太郎が相談をうける。磁気コード方式で蔵書を管理している図書館という設定で、パソコンに記録されている過去3ヶ月間の館外貸出データから切り裂き犯人を割り出す。ただし、利用者のプライバシーの問題があるため、「館外者がみだりに個人の貸出記録に接することは内規で禁じられているため、図書館長の許可・立会が必要だという。」との記述がある。被害に遭った本の書名を全てパソコンに打ち込むと、データ検索を命じる操作をして待つだけで、入力された本を借りた人物を表示することが可能となる、という設定になっている。また、捜査のため、綸太郎は司書の穂波に「被害に遭った本を借りた人間を、その冊数の多い方から順番に並べたリストを呼び出してくれないか?」「松浦雅人（筆者注・図書館の蔵書の扉ページを切り取った人物）の館外貸

出記録から、書名のリストを呼び出してくれないか？ ふだん読んでいる本を見れば、彼の人となりが想像できるかもしれない。」と依頼し、そうした情報がすぐにリストアップされるストーリーになっている。これはある個人が図書館から借りた本についての記録が、返却した後も消去されないで残っていることが前提となって初めて可能となるものである。

・「過ぎにし薔薇は……」⁵⁾ (初出：『野生時代』1992. 7 「図書館綺談」を改題)

ある利用者が返却した本には、すべて「葉」のような紙片がはさみこまれている。司書の穂波は、「ちょっとこれを見てくれない」といって、倫太郎に相談する。それは「この半月の間に、本間さん（筆者注・紙片をはさみこんだ人物）が借りた本のリスト」であり、「本当は、個人貸出記録を外部の人に見せたりしちゃ行けないんだけど、事情が事情だから、特別にね。」と発言する。

さらに「穂波は番号簿のページを繰って、近在の公立図書館に問い合わせの電話をかけ」質疑応答を繰り返したあと、「尾山台と緑が丘、それに奥沢図書館の三ヶ所から確認をとったわ。詳細は部外秘扱いで、教えてもらえなかったけど、この二週間、本間さんがうち以外の三つの図書館でも、全く同じ行動を繰り返していることは確かね。」という言動をしている。

この2編は、『法月倫太郎の冒険』に収録されているものだが、「図書館の自由」といった概念は、作者の念頭には意識されていなかったと考えられる。もちろん図書館利用者のプライバシーに対して何の配慮も必要ないと考えていたわけではなく、「外部の」人に見せていいものではない、とされており、「館長の許可・立会が必要」「詳細は部外秘扱い」などの表現には、一定の配慮が必要であると意識されていることは示されている。

文庫版『冒険』のあとがきに紹介された、読者からの手紙を受け取って以降に、初出が雑誌に発表されたものは、次のような内容である。

・「背信の交点」⁶⁾ (初出：『IN★POCKET』1996. 10)

ある事件の背景について調べるために、穂波は、「板橋の図書館の知り合

いに頼んで、品野道弘（筆者注・亡くなった人物）の貸出記録を調べてもらったの。本当は図書館員の倫理綱領に反するんだけど、まあ今回は大目に見てもらって。」という。「そしたら、やっぱりミステリーをいっぱい借りてたんですって。全部きちんと目を通したかどうかは別として、貸出の冊数を聞いた限りでは、ものすごく勉強熱心だったみたい。」と、得意げに報告するのを聞いて、綸太郎は半分あきれた顔になり、じろりと穂波をにらみつけた、とある。ここでも「図書館員の倫理綱領」の存在については言及されているが、図書館員である穂波の行動はそれにとったものであるとはいえない。

・「身投げ女のブルース」⁷⁾（初出：『小説すばる』1998.3・4）

この中には、図書館員の沢田穂波は登場していないが、警察の捜査が国会図書館に及ぶストーリーになっている。ある事件の容疑者三好明雄（運命鑑定所の秘書で東大出の秀才という設定）が、アリバイを述べる際に、犯行のあった時間は国会図書館に行っていたと主張し、「国会図書館では入館者全員に利用申込書を書かせて、入館カードと引き換えるシステムになっていますし、館内資料を閲覧・コピーする時も、資料請求票や複写申込書を出さなければならない。よく調べてもらえば、私の筆跡で住所・氏名・年齢・電話番号を書き込んだ申込書が、保存されているはずですよ。それらの記録を照合すれば、私があの日午後ずっと、国会図書館の中にいたことが証明できるでしょう。」と発言する。警察は、利用申込書等を調べようとするが、「国会図書館が内部書類を見せることに難色を示して」いて、それは「利用者のプライバシーを守ることを定めた図書館協会の決議に抵触する恐れがある。」からだとして紹介される。さらに、実際に地下鉄サリン事件の際に、国会図書館の対応が問題とされた件にもふれている。

先の文庫版あとがきの後半には、NHK「ぴあの」事件に関する『朝日新聞』1994年5月11日夕刊の記事、地下鉄サリン事件に関する国会図書館の対応に関する『図書館とメディアの本　ず・ぼん②』の記事が転載されている⁸⁾。それは、読者からの手紙に触発されて、「図書館の自由」が関係す

る事例に、作家・法月綸太郎が関心を示すようになりつつあったことを示すものであり、そうした情報を、ストーリーに取り入れたのが、このケースと言える。

・「リターン・ザ・ギフト」（初出：『小説現代五月増刊号メフィスト』1999）

綸太郎がある本を借りたいと思って穂波のいる図書館にやって来るが、それは紛失書扱いになっている。穂波は、コンピュータに借りた記録が残っている人物に電話するが、連絡がつかない。綸太郎が自分でコンピュータを操作して、その人物の名前と連絡先を見ようとして、「カウンター越しにマウスを触ろうとすると、ピシャリと手をはたかれた。『ダメ。知ってるでしょ、図書館員は利用者のプライバシーを漏らしてはいけないって。』『だって、本を借りっぱなしで持ち逃げするようなやつだぜ。プライバシー以前の問題だ。』『わたしに八つ当たりしないで。頭に来るのはわかるけど、これは図書館と利用者の信頼関係の問題だから、外部の第三者に対しては個人のプライバシーの方が優先されるの。あなただって自分がどんな本を読んでるか、見ず知らずの他人にとやかく言われたくはないでしょう?』』というやりとりには、それまでの作品よりも、一步踏み込んだ記述がうかがえる。それにつけて、1980年、日本図書館協会が「図書館員の倫理綱領」を採択したこと、その中で、第3「図書館員は利用者の秘密を漏らさない。」とあること、を本文中で紹介している⁹⁾。

また、綸太郎の父親である警視が穂波の図書館を訪れ、殺人事件の容疑者宅で押収した図書館の蔵書について、それを借りた人物の名前と貸出日を見かねると「警視が目的を告げたとたん、穂波の表情が固くなった。すうっと息を吸い込んでから、丁寧だけれど毅然とした口調で、『申し訳ありません。利用者のプライバシーに関する事実の照会は、理由の如何にかかわらず、応じることはできません。『図書館の自由に関する宣言』と『図書館員の倫理綱領』でそのように定められています。わたくしどもの業務は、利用者との信頼関係の上に成り立っているのです、その存在基盤を揺るがすようなことはできないんです。』』と答えている。『法月綸太郎の冒険』に収録されていた

作品での発言に比べると、利用者のプライバシーを守ることの必要性についてははっきりと自覚し、それを日常の行動の際にも反映させた対応といえる。ただし、ここまで切り口上で対応しているのは、逆にリアリティの面でどうかと思われるところでもある。現実の図書館では、カウンター業務を担当しているのは、司書資格を持っている人たちばかりではないし、資格を持っていても「図書館の自由」や「利用者のプライバシー」について、それほど意識していない図書館員も存在すると思われる。「警視が何と言おうと、穂波は譲るつもりはないようだった。きっぱりと首を横に振って、ダメなものはダメです、憲法三十五条に基づく令状がない限り、回答はできませんと断った。」という描写は、非常に自覚的な図書館員として描かれてはいるが、これが実態であると言いきれない部分が存在するのも事実である¹⁰⁾。

このあと、他の方面での捜査が進行し、図書館での個人の利用記録の捜査について、「令状の文面に目を通し、捜査の対象がきちんと特定されていることを確認すると、館長立ち会いの下」で利用者の記録に関するに捜査に応じている¹¹⁾。

法月綸太郎の「図書館シリーズ」では、とくに図書館での利用者のプライバシーの扱いに関して、読者の手紙をきっかけに、作品の中で「図書館の自由」についての認識を随所に取りいれている。発表時期が新しいものほど利用者のプライバシーを考慮した内容になっており、「リターン・ザ・ギフト」では、警察の捜査に毅然として対応する図書館員の姿が描かれている。これが、リアリティの点で「すべての図書館での現実の姿です」と断言できないのは、むしろ図書館界の問題である。

5. おわりに

図書館のイメージや、そこにどういう機能を期待するかは、著作を執筆する立場にある人たちの間でも一様ではない。たとえば、『マリ・クレール』の「対談・鹿島茂×中沢けい 読書のアルカディア」では、フランスの図書館事情について紹介した後、鹿島「最近の日本の図書館はひどくて、ベスト

セラー 20 冊も入れるくせに、オーソドックスな本は揃えてないでしょう。」中沢「一番困るのが図書館と書店が同じようになってしまうことです。もともと図書館というところは、末代まで読むような本を収蔵する場所という、啓蒙主義的な発想に支えられてるはずなんですけどね。」というやりとりがある¹⁾。

一方、利用する側の立場から『図書館であそぼう 知的発見のすすめ』を著した辻由美は、同じフランスでの図書館利用体験を紹介した後、日本の公共図書館事情について「公共図書館は活気を感じさせてくれる場所でもある。図書館は受験生のたまり場という従来のイメージも、いまはかならずしもあてはまらない。図書館利用者の幅は広がりつつある。」という。「図書館を日常的に使っている私も、利用者の層があつくなっていることを、最近、肌で感じている。日曜日に地元の図書館内をあるきまわると、子どものコーナーも、ヤングアダルトのコーナーも、新聞・雑誌のコーナーもレファレンス室も貸し出しカウンターも人でいっぱい、こんなに多種多様な人がこんなに多種多様な目的でやってくるのかと、いまさらのようにおどろかされる。」「百人いれば百とおりの使いかたがある、これこそが図書館なのだ。」と述べている²⁾。

ミステリの中でも、今回取り上げた二人の作品では、現実の図書館を反映したシーンがいくつかの作品に見られた。東野圭吾は多くの作品に図書館を登場させ、多様な利用者や利用状況を作品に発表している。法月綸太郎は、とくに図書館でのプライバシーの扱いについて、読者の投書をきっかけに、図書館の対応に一定の理解をもったうえで、そうした事情を背景にした作品を発表してきている。

最近では、市の図書館を財団法人に組み込んで市役所と分離独立する計画の進行で、地方公務員でなくなることになった図書館の司書が、利用者の秘密を守ることにに関して、公務員法の適用をめぐるもめている、といった、近年の状況を反映した作品（若竹七海『詩人の死』）も登場している。この作品の中のある人物には「司書ってもともと浮世離れした連中」と言われて

しまっているが…³⁾。

今回は日本のミステリついて、図書館との関係を、図書館員に関する描写の部分を中心に分析したが、こうした図書館のイメージに関する研究を、さらに多様なアプローチを通してすすめていきたい。それは図書館経営に関する世論を構成している要素のひとつを、解明する作業であると言えよう。

注

1. はじめに

- 1) たとえば次のような意見がある。「全国に五千、せめて三千の図書館があって、まじめに作った本は必ずそこが買いあげるということになれば、出版の世界の事情も変わろうというものである。」奥本大三郎『虫のゐどころ』1992, 新潮社, p.118

図書館での資料選択については、「図書館 無料の貸本屋? ベストセラームめぐり論議」『朝日新聞 (大阪本社版)』1999年5月28日, p.25 というタイトルの記事が掲載された (内容は前日の東京本社版のものとはほぼ同じ)。また、津野海太郎「市民図書館という理想のゆくえ」『図書館雑誌』vol.92 no.5 pp.336-338 をきっかけに、『図書館雑誌』誌上で資料選択に関連した見解が発表されている。

- 2) 飯島朋子『映画の中の図書館 Library Cinema』1999, 日本国書刊行会
- 3) 市村省二「図書館映画への招待」『TRCほんわかだより』no.130 1998. 4 pp.18-24
- 4) 東史「映画の図書館・図書館の映画」は『図書館雑誌』vol.91 no.1 pp.46-47, vol.92 no.2 pp.100-101, vol.93 no.4 pp.274-275 に掲載されている。
- 5) 図書館施設・設備と利用者のイメージについては、「図書館の立地に関する研究」『羽衣学園短期大学紀要』(文学科編), vol.33, 1997, pp.1-15

職員の対応も含めた図書館のサービス体制と利用者のイメージについては、「図書館イメージの変化 川西市民の読書実態と図書館像」『羽衣学園短期大学紀要』(文学科編) vol.30, 1994, pp.1-16 「図書館のサービス体制について」『羽衣学園短期大学研究紀要』vol.34, 1998, pp.11-20 など

メディアに登場する図書館については、「映像メディアの中の図書館 1992」『公立図書館の思想と実践』1993, 森耕一追悼事業会, pp.292-309 「フィクションの中の貸出方式 映画「Love Letter」「耳をすませば」の問

題点』『羽衣学園短期大学紀要』(文学科編), vol. 32, 1996, pp. 1-19 など

2. 日本のミステリ作家と図書館

- 1) 長谷部史親『推理小説に見る古書趣味』1993, 図書出版社, pp. 61-62
- 2) 同上, p. 139
- 3) 綾辻行人, 井上夢人, 大沢在昌, 恩田 睦, 笠井 潔, 京極夏彦, 柴田よしき, 法月綸太郎, 馳 周星, 東野圭吾, 山口雅也: 著, 千街晶之: インタビュー『ミステリを書く!』1998, ビレッジセンター出版局
- 4) 山口雅也: 監修, 千街晶之・福井健太: 編『ニューウェイヴ・ミステリ読本』1997, 原書房 この中で図書館利用についてふれているのは, 歌野晶午(1961年, 千葉県生まれ), 折原 一(1951年, 埼玉県生まれ), 倉知 淳(1962年, 静岡県生まれ), 西澤保彦(1960年, 高知県生まれ)の4人。
- 5) たとえば「日本の公共図書館は, 一九六五年ごろから急激な発展をとげ, 当時八〇〇万冊の年間貸出冊数であったものが, 現在までの一五年間で約一五倍の一億二〇〇〇万冊に達しています。」という指摘がある。前川恒雄『前川恒雄著作集1 図書館について』1998, 出版ニュース社, p. 12 この箇所は『図書館で何をすべきか』として, 1981年にまとめられた講演録を収録した部分である。
- 6) フィクションの書き手の利用体験と図書館の貸出方式との関係については, 「フィクションの中の貸出方式 映画「Love Letter」「耳をすませば」の問題点」(前掲)において論じた。

3. 東野圭吾と図書館

- 1) 「相変わらずの完成度の高さに加え, これまでの作品には見られなかった要素が盛りこまれた大作ミステリーだ。」(『小説現代』1999. 9, p. 391), 「最初にひとつだけいえることは, これは東野作品の頂点をきわめた傑作。」(『小説すばる』1999. 9, p. 134), 「抜群の小説的興趣と斬新な仕掛けに満ちた圧倒的エンターテインメント」(『本の雑誌』1999. 9, p. 38), 「これは, 先月一番唸らされた傑作。」「すべてのシーンに意味があり, 伏線がある。」(『小説推理』1999. 11, p. 271), 「ひとつの無駄もないみごとに構成, 的確な描写に脱帽だ。」(『ダ・カーポ』no. 430, p. 154), 「凍りつくような虚無の精神と深い哀歎をそなえた驚愕のミステリー大作である。」(『アミューズ』1999. no. 18, p. 59) など
- 2) 東野圭吾『学生街の殺人』1987, 講談社
- 3) 東野圭吾『魔球』1988, 講談社
- 4) 東野圭吾『香子の夢』1988, 祥伝社

- 5) 東野圭吾『十字屋敷のピエロ』1989, 講談社
- 6) 東野圭吾『変身』1991, 講談社
- 7) 東野圭吾『同級生』1993, 祥伝社
- 8) 東野圭吾『分身』1993, 集英社
- 9) 東野圭吾『むかし僕が死んだ家』1994, 双葉社
- 10) 東野圭吾『虹を操る少年』1994, 実業之日本社
- 11) 東野圭吾『悪意』1996, 双葉社
- 12) 東野圭吾『名探偵の呪縛』1996, 講談社(文庫)
- 13) 東野圭吾『秘密』1998, 文芸春秋
- 14) 東野圭吾『私が彼を殺した』1999, 講談社
- 15) 東野圭吾『白夜行』1999, 集英社
- 16) 東野圭吾『浪花少年探偵団2』1993, 講談社
- 17) 東野圭吾『探偵ガリレオ』1998, 文芸春秋
- 18) 東野圭吾『学生街の殺人』pp. 364 - 365, p. 373
- 19) 東野圭吾『魔球』1991, 講談社(文庫), pp. 186 - 188
- 20) 東野圭吾『分身』pp. 44 - 46
- 21) 東野圭吾『名探偵の呪縛』pp. 11 - 13
- 22) 同上, p. 86
- 23) 東野圭吾『秘密』pp. 37 - 45
- 24) 東野圭吾『白夜行』pp. 463 - 464
- 25) こうしたタイプは、たとえば1999年4月に、宝塚大劇場で上演された『再会』に登場する図書館員：サンドリーヌを演じている月影瞳が、石井徹也『石井式宝塚評判記1』1999, 青弓社, p. 67 において「図書館で働いているときの瓶底メガネのブス作りが、演出は類型的なんだけど、月影自身がひどくおかしい。」と評されているのと、共通する部分があるものと思われる。
- 26) 最近の状況を示す事例として、「会社員、図書館にシフト 不況…残業・小遣い減り アフタファイブ利用急増 話題本、予約待ちも」『日本経済新聞』1999. 6. 26 (夕刊), p. 11 などがある。

4. 法月綸太郎と図書館

- 1) 法月綸太郎『法月綸太郎の冒険』1992, 講談社, p. 176
- 2) 山口雅也：監修, 千街晶之・福井健太：編『ニューウエイヴ・ミステリ読本』1997, 原書房, pp. 98 - 99
- 3) 法月綸太郎『法月綸太郎の冒険』1995, 講談社(文庫), pp. 442 - 451
- 4) 同上, pp. 237 - 249

- 5) 同上, pp. 389 - 393
- 6) 法月綸太郎『法月綸太郎の新冒険』1999, 講談社, pp. 50 - 51
- 7) 同上, pp. 176 - 178
- 8) 法月綸太郎『法月綸太郎の冒険』1995, 講談社 (文庫), pp. 447 - 451
- 9) 法月綸太郎『法月綸太郎の新冒険』1999, 講談社, pp. 260 - 262
- 10) 同上, pp. 263 - 265
- 11) 同上, pp. 307 - 310

5. おわりに

- 1) 対談・鹿島茂×中沢けい「読書のアルカディア」『マリ・クレール』1999. 9, p. 95
- 2) 辻 由美『図書館で遊ぼう』1999, 講談社, pp. 190 - 192
- 3) 若竹七海「詩人の死」『名探偵の饗宴』1998, 朝日新聞社, pp. 206 - 207